

天理大学ふるさと会 海外研修報告書

ーノルウェーの福祉に関する現状を知るー

人間学部人間関係学科社会福祉専攻

4年次生 山本真心

1. はじめに

この度は、ふるさと会海外研修生に選出していただき、ありがとうございました。私自身、これまで一度も海外経験がなかったため、1人で海外へ行くということに対する不安もありましたが、ふるさと会、国際交流センター室、天理大学の先生、ノルウェー現地のたくさんの方々のご協力のもと、海外研修を実施し無事に帰国することができました。今回の研修に関わってくださったすべての方に心から感謝しております。貴重な機会を与えて下さり、本当にありがとうございました。

本レポートを通して、現地での行動や学んだこと等を報告させていただきます。

2. 応募動機

2020年度の秋学期に履修していた「社会理論と社会システム」という授業のなかで海外の福祉のあり方や人柄などについての動画を視聴する機会があり、海外に興味を抱くようになりました。その中でも福祉国家である北欧に行ってみたいという思いが強く、海外経験がないことに加え自身の英語力に対する不安もあり応募を断念しようと思ったこともありましたが、ふるさと会事務局にメールにて胸の内をお伝えさせていただいたところ、尾上様よりアドバイスやご意見をいただき、応募することを決断いたしました。

3. 研修期間

2023年3月8日（水）～2023年3月18日（土） 【10日間】

4. 渡航先

ノルウェー オスロ

5. 研修目的

- ・世界最先端と言われる北欧のユニバーサルデザインを実際に自分の目で確かめること
- ・福祉施設に足を運び、北欧ならではの取り組みや福祉のあり方、教育のあり方を学び日本と比較すること

6. 研修先

・ OSLO SANITETSFORENING BRUSETKOLLEN AS

(現地 Asker にある児童養護施設)

7. ノルウェーについて

ノルウェーは国連開発計画が発表している国民の豊かさ指数「人間開発指数」で毎年トップにランクインされてきた。付加価値税率は 25%、食料品に関しては 15% というように非常に高い税率で世界トップクラスに物価が高い国であると言われている。

出産費用や学費は基本無料で医療費に関しても年間自己負担額超過分は無料となる。

高齢者に対して医療や年金などの社会保障を充実させつつ、社会参画を推進しており、元気な高齢者は年齢に関係なく現役として働ける・地域社会で活躍できるように国として支援している。

高齢者を資産とすることで国力の向上を促すとともに、高齢者自身の幸福度の向上にも寄与していると考えられることができる。

8. 行動記録

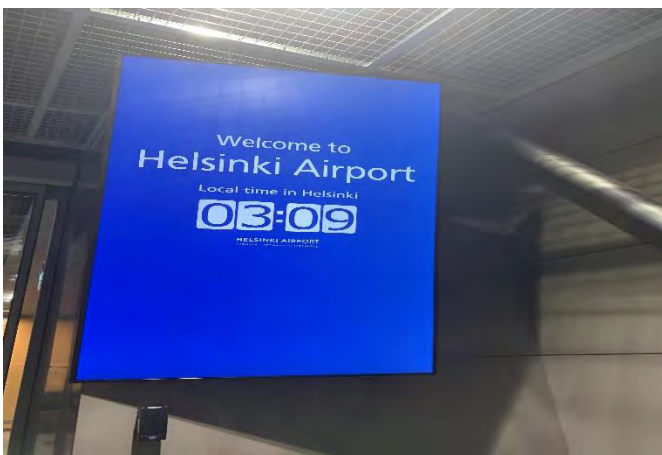
【3月8日(水) - 3月9日(木)】

移動日

近鉄奈良駅 - (高速バス) → 伊丹空港 → 羽田空港 → ヘルシンキ空港
→ オスロ空港 - (電車) → オスロ中央駅 → 宿泊先ホテル

日本からノルウェーまでは上記のルートで渡航しました。

1人で飛行機に乗ることさえも、今回初体験だったので始終緊張が続いていました。ヘルシンキ空港にて乗り継ぎ時間を過ごしている際に自分が海外にいるということを実感しました。



そして3月9日の午前中にオスロ空港に到着しました。オスロ空港から宿泊先のホテルの最寄り駅(オスロ中央駅)まで電車で約30分かけて移動しました。オスロに着いてからも緊張は続いていましたが、目に映るものすべてが私にとって新鮮でとてもワクワクしました。

オスロ中央駅からは徒歩でホテルに向かい、チェックインを済ませました。自分の部屋に入った瞬

間、移動中ずっと張りつめていた緊張がとけ、疲れを一気に感じました。この日はその後に備えて移動の疲れを取るために自室にてゆっくりと過ごしました。

【3月10日（金）】

この日はオスロを散策しました。

その中でユニバーサルデザインを発見するという視点から気付いたことをいくつか取り上げます。

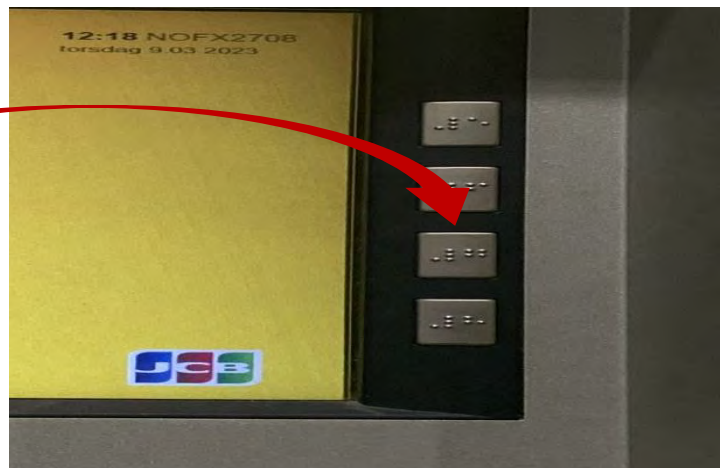
〈駅周辺〉

電車の車両に車椅子、ベビーカー用のスロープが設置されており、ボタンを押せば自動でそのスロープが稼働します。ベビーカーや車椅子の方が乗車する際にスロープを準備してもらうためにわざわざ駅員さんを呼ぶ必要がなく、スムーズに乗車できる仕組みになっていました。また、電車内ではベビーカーに子どもを乗せて乗車している方が多く見られました。日本の電車内でベビーカーを見かけることはどちらかと言うと珍しいイメージがあるので、日本との違いの一つであると感じました。



←電車内にもこのようなスロープ稼働ボタン

が設置されているため、降車も乗車時と同様にスムーズにできる仕組みになっていました。



上の写真は駅周辺に多く設置されていた外国為替を行う機械です。

画面上に案内が出てきますが、画面をタップして操作するのではなく、拡大写真にある点字付きのボタンで操作する仕組みになっていました。画面をタップして操作をするタイプであると視覚障害の方は操作を行うためのボタンが画面上のどの位置にあるのかわかりづらいですが、このように点字付きのボタンで操作するタイプなら手先の感覚を頼りに視覚障害の方も操作できるのではないかと思います。ヘルシンキ空港にもこのタイプの両替機やATMがたくさんありました。

〈図書館〉



←図書館の入口に設置されていたボタンです。このボタンは図書館だけに限らず、美術館などほとんどの施設の入口に設置されていました。



←図書館の中の自由に利用することができる勉強スペースです。ユニバーサルデザインの観点からは少し逸れますが、コンセントも使用可能でとても快適な空間でした。

図書館には、Free Water もあり、家から水筒やペットボトルを持参していれば、持ってきた分の水分がなくなっても自由に水を汲んで飲むことができます。私が図書館を訪れたのは平日の朝 10 時頃でしたが、図書館内には様々な年齢層の人が集まっていました。

←図書館では日本語が書かれた本も発見しました。

ノルウェーに到着してから自分のスマートフォン以外で日本語を目にする



機会がほとんどなかったのが発見した時はうれしさと安心感がありました。

また、レインボーの帽子や傘が販売されている雑貨店がたくさんありました。本屋やスーパーにおいてもレインボーフラッグが飾られている店舗がたくさんありました。私が宿泊したホテルのカウンターにもレインボーフラッグが飾られていました。



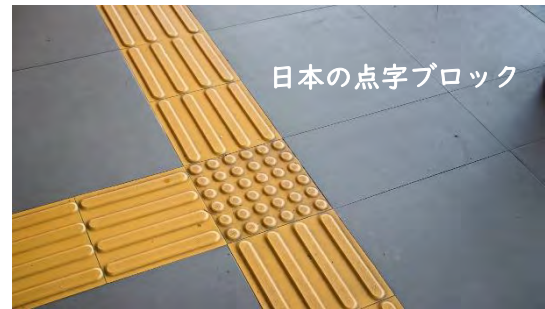
○レインボーフラッグとは

LGBTQ をはじめとしたさまざまなセクシュアリティの尊厳、多様性を表している旗のことです。考案者はサンフランシスコのギルバート・ベーカーという人物で 1976 年にデザインされたと言われています。レインボーフラッグが広まった当初はピンク・レッド・オレンジ・イエロー・グリーン・ターコイズ・ネイビー・パープルの 8 色で構成されていました。現在はピンクとターコイズを省いた 6 色となっていますが、その理由は考案された当時の印刷技術では 8 色のフラッグを大量印刷するのが難しいとされたためだそうです。構成色が減っても、その意味合いや精神は変化していません。

レッド=生命	オレンジ=癒し	イエロー=太陽	グリーン=自然	} 各構成色の意味
ネイビー=調和	パープル=精神	(ピンク=性)	ターコイズ=芸術	

街中の多くの場所にレインボーフラッグ等が飾られており、レインボーのものを身に付けている人も見られ、国としてさまざまなセクシュアリティ・多様性を尊重していることが感じられました。

また、オスロの路上に設置されていた点字ブロックと日本の点字ブロックは大きく異なっていました。加えてオスロでは点字ブロックの設置数も日本と比較して非常に少ないように感じました。



日本の点字ブロックは黄色のものが一般的ですが、オスロではシルバーを基調としたものが設置されていました。なぜシルバーを基調としたデザインなのか調べてみると、街の景観を守るため、そして視覚的ノイズが少なく分かりやすい「ライン」の表示は1本か2本であるという視覚障害者を対象としたテスト結果に基づいていることが分かりました。点字ブロックの設置数が日本と比較して少ない背景には、ノルウェーを含む北欧諸国では視覚障害者が外出する際はヘルパーが同行することがほとんどであり、手引き等のサポートをしてもらえるため、点字ブロックの必要性があまりないことが関係しているのではないかと帰国後、大学の先生との会話で明らかになりました。（この日は他にも、ヴィーゲラン彫刻公園やアーケシュフース城に行きました。）

【3月11日（土）】

この日は、大学の先生のお知り合いのオスロに駐在している方と13時ごろに待ち合わせをし、夜まで行動を共にさせていただきました。昼食をとるためにレストランに連れて行っていただき、その後、オスロのスーパーやお店を案内、晩御飯もまた別のレストランに連れて行っていただきました。この一日を通して、ノルウェーでの生活や働き方などに関するお話をたくさんお聞きすることができました。その内容を以下にまとめます。

〈ノルウェーに駐在していて感じること/気付いたこと〉

- ・ノルウェーでは出勤しても小一時間は雑談から始まる

社内で小一時間雑談をすることで社員同士の親密感が高まり、チームワークの向上やより良い社員同士の関係性の構築につながるのではないかと感じました。

- ・チャイルドシック休暇がある

チャイルドシック休暇は子どもが病気や怪我で仕事を休まなければならない場合、通常の有給休暇とは別に有給（給料100%支給）で年間10日間を上限に休暇を取ることができそうです。子どもが3人以上いる場合は上限が10日から15日に増加します。ノルウェーでは共働きの家庭が一般的で、子どもを出産した場合、ほとんどの人が育児休暇を取得します。父親休暇と母親休暇があり、法律によって父親も必ず育児休暇を取得しなければならないと定められています。日本に関し

ては、厚生労働省の雇用均等基本調査のデータによると男性の育児休暇取得率は令和元年で7.48%となっています。0.42%であった平成11年度と比較すると割合自体は増加しているのですが徐々に日本も男性の育児休暇取得が当たり前となっていくのではないかと推測しているとともに、ノルウェーにおける法律によって男性の育児休暇が義務付けられていることは非常に子育てをしやすい環境を構築することに貢献しているように私は思います。

- ・ノルウェーで働き、ノルウェーの人々の働き方を知った上で日本での自分の働き方を振り返った際に育児をほとんどしていなかったと痛感し、反省すべき点であると感じた

- ・ノルウェーの人々は良い意味で働かない

ノルウェーでは日曜日はほとんどのお店が定休日です。日本のようにたくさんのお店が通常通り営業していることはないそうです。平日に関しても夜遅くまで営業しているお店は少なく、コンビニや飲食店に限られているとのことでした。街を歩いている際、カフェや雑貨店などは特に閉店時間が早いように感じました。

- ・ほとんどの人が金銭的に余裕を持っているため、イライラしている人、せっかちな人が少ない

- ・火力発電はせず、主に水力と電力によって発電をし、環境を大切にしている国

しかし、雪の季節は滑り止めが付いたスキー用の靴等を履く人が多く、その靴でコンクリートの地面が削れて空気汚染につながっているということをはじめとする環境面の問題もあると仰っていました。

- ・移民が多い国

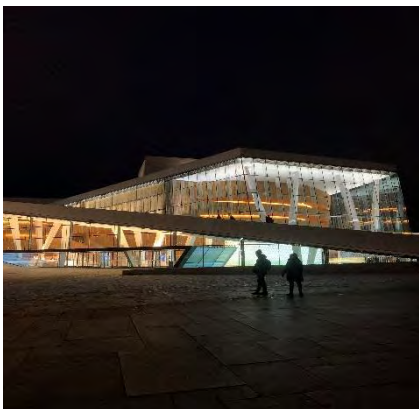
オスロを歩いていると観光客以外にも黒人の方やアジア圏の方を目にする機会が多々ありました。私はノルウェーに対して移民が多いというイメージは持っていなかったため少し驚きました。

駅周辺にはホームレスの方もおられ、福祉国家であっても、制度を利用できない人が当然存在し、福祉国家で生活をしているから必ずしもすべての人の必要最低限の生活が保障されているとは言えないことを痛感しました。



【3月12日（日）】

この日は現地施設のアポイントメントを取ることができなかったのでフリーでした。14日に訪問予定の施設がオスロから少し離れた Asker というところにあり、電車で移動する必要があったので当日になって迷ってしまうことがないように下見をしておきました。また、この日は日曜日で、前日に聞いていたように、多くのお店が定休日で、中央駅周辺のお店でさえほとんどの店舗が閉まっていた。下見の後、オスロ市庁舎やオペラハウス、オスロ大聖堂、ムンク美術館を訪れました。オペラハウスは冰山をイメージして造られ、広い通路がそのまま屋根になっているような構造になっていました。屋根の上まで登ると、眺めがとても良く、昼と夜、眺める方向によって景色が異なるので様々な景色を楽しむことができました。ムンク美術館はムンクが残した27000点以上の作品を所蔵しています。ムンク美術館は2021年10月22日にオスロのトイエンから変わってビョルヴィカ地区に新たに開館されたそうです。美術館の建物は13階あり、12階及び13階はレストランでしたが、その他の階には作品が展示されており、すべての作品を見て回るのに約4時間以上かかりました。今回の研修テーマと直接的には関係がありませんが、私は美術にも非常に興味があるので、ムンク美術館にてとても有意義な時間を過ごすことができました。



【3月13日（月）】

この日はノルウェー現地でワーキングホリデーをされている日本人の方とお会いさせていただきました。その方が働いているフグレンというカフェでたくさんお話をさせていただきました。

会話内容の抜粋を以下にまとめます。

〈ノルウェーの福祉等に関する事柄について〉

- ・教育の機会が平等に与えられている
- ・本当に学びたいことを学びやすい/学び直しがしやすい環境

→ノルウェーは大学の授業料が無料であることに加え、専攻を自由に変更することが可能

好き勝手に専攻を変更できるということではありませんが、専攻している分野と異なる分野を学びたくなった際は、その学部等を受験し直さなくても、学期が変わるタイミングで申請をしたり、テ

ストを受けたりすることで、専攻の変更ができるそうです。また、このような制度があるため、「決して一概には言えないし、個人的な意見だけど、ノルウェーでは多くの人が自分の好きなことを仕事にしている人が多いイメージがある」と仰っていました。そして大学入学の平均年齢は 30 歳というデータもありました。

- ・高税負担、高福祉であるが故に国民以外の制度や保障を受けられない人にとっては生活しにくい側面もある
- ・医療の面において症状等によって自分でその症状に適した科に行くのではなく、総合的に一人の医師（ホームドクター）に診断してもらう仕組みになっている
- ・性に対してとても寛容、オープンな国であり、女性を対象に無料でピルを配布している
- ・LGBTQ に該当する友人がたくさんいる

ノルウェーではレインボーフラッグが至るところに飾られているように、国として性の多様性を尊重しているため LGBTQ に当てはまるのが珍しいこと・隠さなければいけないこと・恥ずかしいことといったような考え方、価値観はほぼゼロに等しいそうです。日本においても近年は 255 の自治体で同性パートナーシップ制度が施行されているなど性の多様性の尊重が重要視されているようにも思えますが同性婚自体はまだ認められていないなど、LGBTQ に対する理解はまだまだ足りていないと私は感じます。簡単なことではないかもしれませんが、制度を整えるだけでなく、LGBTQ に該当するという言葉を躊躇いなく公言できる環境を構築していくことが現代の社会には求められているのではないかと考えました。

フグレンにてお話をさせていただいた後、現地に駐在されている方の自宅に招いてもらい、タコスパーティーに参加させていただきました。このパーティーは現地でワーキングホリデーをされている方が「せっかくならノルウェーで多くの人と関わってほしい」と当日に企画してくださいました。明確に決まっているわけではありませんが、毎週金曜日にタコスを食べることがノルウェーの文化の一つだそうです。タコスパーティーに参加させていただいたことで、現地の日本人の方、そしてノルウェー人の方と交流をすることができました。この日パーティーで出会ったノルウェー人の方は日本に一度訪れたことがあり、日本にとっても興味を持っている方々だったので、日本に関するお話をたくさんすることができました。ご飯が美味しい、交通機関の運転が常に正確、遊ぶ場所・歴史的な建物がある、クオリティの高いアニメが豊富、人が優しいことが日本の魅力だと感じると話してくださいました。一方で、日本人は働いている時間が長く、職場のルールも厳しいイメージがあると仰っていました。また、その方は奈良を訪れたこともあるそうで、奈良を観光した時の写真を見せてくださいました。ノルウェー現地で奈良のことを詳しく知っているノルウェー人と出会えるとは考えてもみなかったもので、とても感慨深かったです。



←タコスパーティーの様子

この日は研修期間の中で唯一、一日中雪が降り続いた日でした↓



【3月14日（火）】

この日は Asker にある児童養護施設 OSLO SANITETSFORENING BRUSETKOLLEN AS に訪問させていただきました。

施設は Asker 駅から徒歩で 30 分ほどかかるところにあり、駅までは施設のマネージャーさんが車で迎えに来てくださいました。車で 10 分ほどかけて駅から施設に移動し、施設を案内していただきました。この日はオスロにある各施設のマネージャーさんが訪問施設に集まってミーティングをされていました。ミーティング室、キッチン、事務所と施設内を見せていただいた後、マネージャーさんを含めた計 3 名の施設スタッフの方とお話をさせていただきました。

お話させていただいた内容を以下にまとめます。

☆子どもたちを支援する上で大切だと思うこと/心掛けていることは何か

- ・子どもを支援する上での一番のゴールは子どもが本来の家庭で生活できるようにすること
- 家庭内の事情で親元を離れて施設で生活をしている子どもにとって、施設が居心地の良い居場所一つの家庭となるように夜ご飯をスタッフと一緒に作る機会や、自由に映画やスキーに行くことができる環境を整えているが、施設での生活に子どもが満足しているからスタッフもその現状に満足するのではなく、どうしても叶わないケースもたくさんあることを受け入れつつも、子どもがもとの家庭、家族とともに生活できるようにすることであるという支援の根本的な目標を忘れないようにしている。この目標を果たすには子どもだけでなく、親に対するサポートも必要不可欠である。子どもと一緒に過ごす事が困難な親はほとんどが他者からの支援を必要としている。

- ・スタッフと子どもの相性を見極める

スタッフも子どももお互い人間同士であるので子どもの性別、年齢、性格等によって相性の良いスタッフは当然異なる。そのため、スタッフと子ども達一人ひとりの相性を見極めて、相性の良いスタッフがメインとなってサポートしていく。特に 17 歳くらいの年頃の男の子は相性の良いスタッフを見極めるのが大変。

- ・子どもの自立につながる支援をする

- ・スタッフ自身がしっかりとした教育を受ける/スタッフのメンタルケアを怠らない

支援する側のスタッフが知識不足であると子どもの問題行動を受け止めることができないといった状況などにつながりかねない。スタッフ自身が幸せでない子どもをサポートすることなどできない。子ども達は大人が思っている以上に敏感で大人がしんどそうにしているとそれを察して余計な気を遣わせてしまうことにつながりかねないため、子どもと関わるスタッフは心身ともに健康な状態である必要がある。そして、スタッフのメンタルケアを適切に行えるよう、施設には臨床心理士等の心理に関する専門家が在籍している。

- ・子どもの周りにある機関、大人がしっかりと連携する

子どもを取り巻く大きな環境

- ① 地域
- ② 政府
- ③ 両親
- ④ 学校

これらすべてで子どもの情報をミーティング等を通して共有する(特にシビアな情報)
 →子どもには良くも悪くもいくつもの顔があるため、情報を提供し合い、包括的な支援策を検討する必要がある

- ・子どもの意見を可能な限り最優先する

子どもの立場が一番強いという認識がある

- ・子どもにとって特に大切な以下のことをそろえる

- ① 健康と安全 最も重要
- ② 周囲の人との良い関係性 良い関係性が子どもの成長にポジティブな影響を与える
- ③ ストレス発散ができる環境 子どもの問題行動＝ストレス発散方法の一つ
 →スタッフが完全に否定してしまわないことが大切
 ネガティブ、ポジティブな感情両方が子どもにとって重要

☆具体的な支援法

- ・施設の子どもが親と一緒に生活していくことができるのか判断する

→スーパーバイズ等を実施し、慎重に判断をする

- ・丸 1 日ではなく、1 時間から 6 時間のように子どもと家庭の状況に合わせて子どもが短時間でも自宅で親と過ごす機会を設けるケースも多くある

→少しずつ自宅での生活に慣れてもらうため、精神的な負担を一度にかけてしまわないため

- ・子どもたちは平均7年間施設で生活を送る

子どもは18歳になった時点で施設を出るか施設に残るのかということについて自己決定をする（最長20歳まで施設で暮らすことが可能）

- ・15歳までは地方自治体によるサポートがある
- ・施設スタッフによるサポートはストップしない



子どもが施設を出ても生活面のアドバイスや金銭面の相談や制度利用の提案等を行う

- ・両親と暮らすことが困難である6歳以下の子どもの多くは施設よりも里親の下で育つ
→物心がつく前から里親と生活することにより深い関係性を里親と築くことができる
施設での生活よりも里親の下での生活を提供することを優先する

☆これからの課題

- ・常に新しいことを持つ姿勢をスタッフが持ち続ける

→それぞれの子どもに合った最善の支援策を発見していきたい

- ・子どもの意見、声を今以上に聞く

施設スタッフは一度にたくさんのタスクを抱えるため大人（特に親）とばかり話してしまいがちであるが、子どもが「どうしたいのか」という思いを聞く時間が足りていない

- ・施設のことを発信していく

支援が必要な子どもの数に対して里親の数が不足しているという現状を解決するため、施設の存在をより多くの人に知ってもらい、地域とのつながりを強化するため

- ・子どもからの施設に対する評価を明確にする

- ・里親の負担が大きすぎる（?）

特に6歳～12歳の子どもは里親に心をひらくまで時間がかかる

里親が子どもの問題行動に対応する必要があるケースももちろんある

→スタッフが自ら出向いて今以上に里親に対する手厚いサポートを実施していくべき

☆コロナ禍について

学校は感染拡大防止のため休校→子どもは家にいることを強制された

家にいながらも友人や社会とつながる手段（SNS等）を持たない子どもは特に社会とのかかわりが失われストレスが溜まる

コロナ禍では日本と同様にサポートを必要とする子どもが増加した

休校という取り組みはコロナウイルスから子どもを守るのと引き換えに子どもの居場所、心の健康を奪ってしまった 学校=子どもの居場所の一つ

大人だけの判断で休校を実施してよかったのか…？

良好な関係が築けている家庭であったとしても 24 時間、毎日一緒にいると精神的に負担がかかってしまう可能性が大きい（親、子ともに）

☆日本の福祉に対する印象

・最も印象的なのは女性のリーダーが少ないこと

→女性のリーダーが少ないことが悪いとは思わないが、ノルウェーは政治家等のリーダー的な立場の男女比率がほぼ半分ずつだからこれについて知ったとき驚いた

ノルウェーでは 1988 年に女性の社会参加を促すため、男女平等法が改定されました。

「公的委員会・審議会は 4 名以上で構成される場合、一方の性が全体の 40% を下回ってはならない」と定められました。＝【クォーター制導入】

2004 年～ 政府系企業の取締役会

2008 年～ 一般企業の取締役会

公的委員会・審議会と同様に罰則規定が設けられるようになった

・マイノリティに対する理解が少し不足している（？）

☆ノルウェーの福祉に対する印象

・教育の機会が平等に与えることに最も力を入れているように感じる

EX) 大学の学費が無料

☆良いソーシャルワーカーとは

・より多くの自身の経験をもとに子どもへの理解を深めることができる

・「子どもが好き」という大きな気持ちがある

→子どもに対する観察力につながる

☆なぜ子どもを支援する立場（ワーカー）になったのか

子どもを支援することは体力的にも精神的にも、とてもハードワークであり、きれいごとだけではどうにもならないこともたくさんある。しかし、子どもの人生に深く関わることができ、子どもの成長を間近で見ることができ、これらが私にとって一番の幸せだから、しんどいことがあったとしてもずっとこの仕事を続けている。

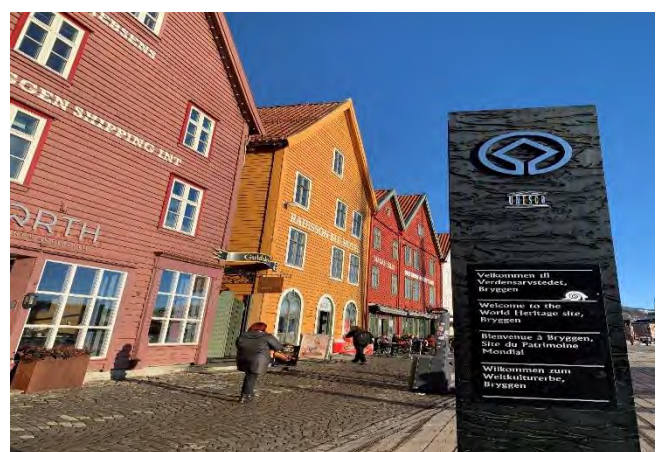
これらのお話の中で、子どもを支援するにあたって子どもの周りにはいる大人が連携することが非常に重要であるというお話が特に印象的でした。その場所や相手、状況によって人は自らのあり方を使い分けることが当たり前で、これには当然子どもも含まれているということを再確認することが

できました。また、子どもの周りにいる大人の中に政府も含まれていることに少し衝撃を受けました。ノルウェーでは政府にも子ども達の情報が事細かに共有されているからこそ、政府が何を最優先すべきかを正しく判断し、危機感を持って子どもへの支援策や、家庭内での問題を事前に防ぐための手段として、育休など子育て世帯に対する手厚いサポートがうまれたのではないかと推測しました。政府と福祉施設がつながっていることは大きな強みの一つであると私は考えました。



【3月15日（水）】

この日は、施設訪問等の予定はなく、オスロ空港から飛行機で約 1 時間かけてベルゲンに行きました。ベルゲンでも素敵な出会いがありました。ベルゲン市内を歩いている際にカメラショップを見つけ、店内に陳列されているカメラを眺めていると店主さんがお店から出てきて、「よければ私の仕事場見ていく？」と声をかけてくださり、店内のワークスペースを見せてくださいました。その方はイタリア出身で、ベルゲンでずっとお仕事をされているとのことでした。日本にも何度か訪れたことがあるそうで、来年の 9 月頃にもお仕事の関係で日本に行く予定があると仰っていました。カメラの詳しい解説やこれまでに撮影してきた写真をたくさん見せていただきました。「私の仕事はとてもアナログなことだからデジタル化が進んでいくにつれ、とても複雑な気持ちになる」と仰っていました。店内で 40 分ほどお話しさせてもらい、私がお礼を伝えるとありがとうと日本語で返してくださり、自国の言語を話してもらえらることの嬉しさを感じました。思わぬ出会いがあり、とても嬉しかったです。



【3月16日（木）】

この日は、14日のタコスパーティーに招待して下さった方々にスキーに誘っていただきました。トラムに乗ってスキー場まで移動しました。私はスキー初心者でほとんど経験がなく、上手く滑るのはハードルが高かったですが、現地の方が丁寧に教えて下さり、助けてもらいながらスキーを楽しむことができました。ノルウェーでは、チョコがスキーをするときに欠かせないアイテムの一つだそうです。ノルウェーで暮らす人々にとってスキーは小さい頃から馴染み深い娯楽であり、スキー場では小さな子どもから大人までたくさんの方がスキーをしており、私から見るとみんなプロ並みに上手で圧倒されました。



【3月17日（木）】



この日は帰国日でした。気さくに声をかけ、親切にしてくださったホテルスタッフの方やホテルで仲良くなった方にお礼を伝え、チェックアウトを済ませて電車でオスロ空港に移動しました。約一週間滞在したホテル、街から離れるのがとても名残惜しかったです。10時30分頃に空港のチェックインを済ませ、空港内のショップ等を巡りながら搭乗時間まで待機していました。13時10分発の飛行機でヘルシンキに向かい、日本からノルウェーに渡航した際と同様のルートで日本に帰国しました。

【3月18日（金）】日本到着日

19時30分頃、伊丹空港に到着することができました。何事もなく無事に帰国できたことに対する安心でいっぱいでした。伊丹空港に家族が迎えに来てくれたので空港から自宅までは車で帰宅しました。自宅に到着してからも、ほんの数日前まで自分がノルウェーにいたことが信じられずフワフワした気持ちが続いていました。この日は時差ぼけの影響に加え、様々な感情が入り交じりなかなか眠ることができませんでした。

9. 感想

本研修では私が想像していた以上の学び、経験をする事ができました。

研修を通して、実際に自分の目で見て、現地の人から実際にお話を聞くことでノルウェーの福祉に関する現状を知ることができました。それだけでなく、ノルウェー現地ではたくさんの出会いがあり、私と初対面にもかかわらず親切にしてくださり、人の温かさに触れ、人と人とのつながりの大切さも学びました。自分自身で決断したことではありながらも、海外経験がない私が一人で海外に行き、無事に研修を終えることができるのか、正直とても不安でした。しかし、たくさんの方のご協力のもと、研修を無事に終えることができた今では、ふるさと会の海外研修制度に応募することを決断して本当に良かったと心の底から思います。

10. 最後に

改めて、この度は本研修を実施させて下さりありがとうございました。

ふるさと会海外研修制度というものがなければ、私は海外に興味はあるものの、実際にその地に行く決断をすることはなかったかもしれません。

一歩踏み出すきっかけを与えて下さり、本当にありがとうございました。

本研修で学んだこと、感じたことを糧に今後の人生を歩んでいきたいです。

繰り返しになりますが、本研修に携わってくださったすべての方に心より感謝申し上げます。

